

第三十二回 馬謖ばしょく諫いさめを拒こばんで街亭がいていを失うう、孔明こうめい涙なみだを揮ふるつて馬謖ましょくを斬きる

—— 泣ないて馬謖ましょくを斬きる ——

(前回ぜんかいから今回こんかいまで)

漢中いすいと渭水いすい平原へいげんの間まには、峻嶺しんれいな秦嶺しんれい山脈さんみゃくが横よこたわっています。蜀しやくから魏ゑいに攻せめ込こむにはここを超こえねばなりません。当時たうじの山越さんげつえのルートは東ひがしから子午道しごとう、駱谷道らくこくとう、褒斜道ほうやとう(斜谷道やこくとう)、故道ことうと四よつあり、いずれも断崖絶壁だんがいぜつぺきの山道さんだうを通とおり抜ぬけねばなりません。他ほかに、一番西さいに山脈さんみゃくを迂回うかいするルートがあり、第一次北伐だいいちじつほくでは、諸葛亮しよこくわいりやうはここから祁山きざんに向むかっています。

『三国志』(諸葛亮しよこくわいりやう伝でん・魏延ゑいぜん伝でん)で少し補足おぎなひしておきます。

このとき諸葛亮しよこくわいりやうは、山脈さんみゃくを迂回うかいする西端さいたんの平坦へいたんなルートをとつて、祁山きざんに向むかかいます。このとき、渭水いすい流域りゆういきの南安なんあん・天水てんすい・安定あんていの三郡さんぐんが魏ゑいに背そむいて諸葛亮しよこくわいりやうに呼よびます。一方ひとで諸葛亮しよこくわいりやうは、趙雲しようゆんに陽動作戦やうどうせんを命めいじます。趙雲しようゆんを箕谷きこくに向むかかわせ、東寄とうきりの斜谷道やこくとうから郿びを攻せ撃げきする動きを見みせませす。魏ゑいの大將軍だいしやうじん曹真そうしんは、この陽動作戦やうどうせんにひっかかり主力しゆりきを郿びを差さし向むかけます。この隙ひまに乗のりじて、諸葛亮しよこくわいりやうは、西北せいぱくに迂回うかいして祁山きざんを攻せ略りやくしたのです。敵てきの意表いひょうをついた作戦さくせんでした。

このとき、部将魏延が、子午道（長安への最短コース）から長安を急襲させてほしいと願いますが、諸葛亮はそれを危険と考え一蹴します。魏延は、自分の才能が発揮できず恨みに思いました。

さて、諸葛亮の渭水流域への進出に対し、魏は曹真を総司令官に任命して、二十万の大軍を率いて出発させます。

ここで王朗という人物が、自分の弁舌で諸葛亮を降伏させてみせると大見得を切ります。

『三国志演義』の王朗は、華歆とともに献帝に魏への禪譲を迫った憎まれ役です。そして、自信満々、諸葛亮に論戦を挑みますが、諸葛亮から漢朝の重恩を受けながら曹丕の禪譲に加担するとは何事かと厳しく論難され、恥辱のあまり死んでしまいます（「武郷侯王朗を罵り死す」）。諸葛亮が弁舌の才をみせる名場面ですが、もちろんフィクションです。

このあと曹真は、西方の異民族である西羌に救援を求めます。西羌には「鉄車隊」とよばれる鉄板で囲われた戦車部隊があつて、蜀軍はその威力に歯が立たず大敗を喫します。

関興は逃げ遅れてあわやというとき、一人の大將が現れて羌兵を蹴散らします。立ちこめる雲霧のなかに現れたのは関羽でした。関興は帰る途中張苞に出会くと、彼もまた関羽に救われたことを知ります。このように、関羽は死後も『三国志演義』の舞台に登場してき

ます。

蜀軍は西羌の「鉄車隊」に苦戦しますが、諸葛亮は、雪が積もった平原に落とし穴をつくり、そこに落とし込んで「鉄車隊」を打ち破ります。ここで曹真は、魏の皇帝曹叅そうえいに救援の要請をします。

この時、司馬懿は、諸葛亮の策略にかかって失脚していましたが、諸葛亮に対抗できるのは彼しかいないとの声に、ここで再び表舞台に登場してきます。そこへ新城太守孟達もうたつが謀反したとの知らせがはいります。

もと蜀の將軍であつた孟達は、関羽を見捨てたことから劉備の怒りに触れることを恐れ、魏に降伏して曹丕そうひ（文帝ぶんてい）に重く用いられていました。しかし、曹丕の後を継いだ曹叅そうえいは、孟達を警戒してしました。

諸葛亮は、荊州けいしゅうに駐屯する孟達に、自分の北伐ほくぱつに呼応こおうさせようと働きかけます。孟達が諸葛亮の誘いに応じて魏に背くと、司馬懿は孟達の意表をつき、電光石火のスピードで攻め立てて鎮圧してしまします。

曹叅は、ついで司馬懿に蜀軍を撃破するよう命じます。ただし史実では、司馬懿と諸葛亮の対決は、二三年の第四次北伐からになります。

司馬懿は張郃を先鋒として、漢中ののどもとにあたる街亭を攻めとろうとします。

○街亭の戦い

『三国志演義』は、「秦嶺の西」に街亭というところがあり、そのそばに列柳城という城があつて、この二か所は「漢中ののどもと」にあたる要害であると書いています。しかし、街亭は渭水の北側にあり、一方秦嶺山脈は渭水の南に連なる山脈ですので、街亭を「秦嶺の西」とするのは、地図上の位置が明らかに間違っています。また、「漢中」も秦嶺山脈の南に位置しますので、はるか北の街亭が、「漢中ののどもと」ということはあり得ません。このように、『三国志演義』は、地理的な位置関係については、とても無頓着なところがあります。

当時の街亭は、中国本土から西方に通じるルート上の重要拠点でした。ですから、北伐の成否は、その街亭を確保できるかどうかにかかっていました。つまり、先に確保したほうが河西回廊また中央アジアへのルートを手にするからです。

諸葛亮の北伐の目的は、もちろん魏を征圧することにあります。しかしそれは国力で遙かに劣る蜀にとって、一挙に成し遂げられる事業ではありません。まずは、中央アジアへの

ルート、すなわちシルクロードを確保し、それを南蛮征伐で拓いた西南シルクロードと結び合わせ、交易こうえきによって弱体な蜀の国力を増強することにあつたと思います。その上で、蜀による三国統一を目指したのではないでしようか。

諸葛亮が「天下三分の計」で、「荊州と益州を支配し、西方の諸蛮族をなつて、南方の異民族を慰撫いぶし」と述べた戦略です。諸葛亮の目は、西方交易路の確保に向けられていたのです。

魏では歴戦の勇将張郃ちやうこうを街亭へ派遣します。一方、諸葛亮も馬謖ばしよくを街亭に向かわせます。第一次北伐は、諸葛亮が魏軍を圧倒してここまで順調に勝利を積み重ねてきました。しかし、「街亭の戦い」で馬謖が戦術を誤り、一挙に頓挫とんざすることになります。

(本文抄)

さて、馬謖と王平わうへいの軍勢は街亭に到着し、地勢を観察した。

「この五つの道筋いのすべてに陣営を築き、木を伐らせて柵さくを作っておけば、敵の一兵たりとも通すことはありません」と王平。

「道の上に陣営を築くとは、有りうべきことではない。ここの横の山は、まわりに連なる山

もなく、林がずっと広がっている。これこそ天の賜たまわった要害だから、山の頂上に陣營を置こう」と馬謖。

「それは、間違っております。道の上に陣營を築けば、たとえ敵軍の総勢が十万あるうとも、やつらを通ることは不可能です。この要路を放棄して頂上に陣營を構えれば、もし魏軍ぎくんがふいに押し寄せ、四方を包囲したとき、この地を保つことはとうていできません」と王平。

「なにを女々めめしいことを。兵法にも『高きに凭よつて下を視みれば、勢い竹を劈さぐごとし』と言うではないか。もし魏兵が攻めて来れば、鎧よろいのかけらも残さず、皆殺しにしてくれよう」と馬謖はからからと笑った。

「私はしばしば丞相のお供をして戦場に出ましたが、行く先々ゆくのちで、いつもお教えをいただきました。この山は、逃げ場のない地形せつち（絶地）でございます。もし魏軍が水を汲みに行く道を遮断すれば、わが方の軍勢は戦わずして混乱します」と王平。

「でたらめなことを言うな。孫子そんしも『これを死地しちに置いて、しかして後に生のちく』（『孫子』九地篇）と言っているではないか。魏軍がわが方の水を汲みに行く道を遮断すれば、わが軍は必死となつて、一人で百人の敵に匹敵ひつてきするだろう。私はかねてから兵書に通じており、丞相すらいつも私におたずねになるのは、おまえも知っているだろう」と馬謖。

「参軍（馬謖の役職）が頂上に陣營を築こうといわれるのなら、私に軍勢を分けていただきたい。私は山の西側に陣營を築き、『犄角の勢（前後あい呼応して敵に当たる形勢）』を取り、魏軍が攻め寄せれば、後ろから呼応いたしましょう」と王平。

馬謖は聞き入れなかった。そこに突然、山中の住民が一団となつてやつて来ると、魏軍が攻め寄せてきたと報告した。王平が立ち去ろうとすると、馬謖は言った。

「私の命令を聞けないというのなら、五千の軍勢を分けてやるから、勝手に陣營を築きに行け。私が魏軍を打ち破つても、おまえが手柄をたてたとは言わせないぞ」

王平は軍勢を率いて山から十里離れたところに陣營を築くと、急ぎ絵図をつくつて諸葛亮のもとに届けさせ、馬謖が山の頂上に陣營を築いたことを報告した。

（解説）

馬謖は、「白眉」と称された馬良の弟で、馬良亡き後、諸葛亮がその将来を期待した才氣煥発の青年でした。孔明はこの馬謖を南蛮征伐にも参軍として同行させ、その意見に耳を傾けました。「才器、人に過ぐ」といわれた馬謖を、後継の人材として育てようとしたのです。そして、北伐の最大の山場である「街亭の戦い」に主将として起用します。

しかし、馬謖は才に走るきらいがあり、劉備もかつて諸葛亮に、馬謖は才はあるが実行力が伴わないから主将は任せてはならない、と念を押していました。しかし、諸葛亮はそれを知りつつあえて起用します。おそらく、蜀の未来を託せる人材に育って欲しい、との思いがあつたのでしよう。

しかし、馬謖は書物の上での溢れる才はありましたが、実戦の経験から身につけるべき知識に乏しく、実戦経験の豊かな王平の進言を聞かず、汲水のできない山上に布陣してしまします。

王平は実戦の中で生涯を過ごし、学問はなく字も書けませんでした。しかし、彼が口述で作成する文章はすべて筋が通り、人に「史記」や「漢書」を読んでもらって内容を把握し、その論評は的を得ていたといわれる人物です。馬謖とは対照的な、実戦の中でたたき上げられた人物でした。おそらく、才に走り気負いが勝ってしまう馬謖に、諸葛亮が補佐役としてつけたのでしよう。しかし馬謖は、王平の助言を無視してしまします。

(本文)

馬謖が頂上から見下ろすと、魏の大軍が山野を埋め尽くし、旗さし物や隊列が整然と打ち

並んでゐる。蜀軍の將兵はこれを見てみな肝きもをつぶし、山から攻め下ろうとしない。馬謖が合図の紅旗あかはたをふつても、將兵はしりごみするばかりで、誰一人動だれひとりこうとはしない。

怒つた馬謖がみずから二人の部將を斬り殺したため、恐れおののいた將兵は、いやいや攻め下つて魏軍に突撃をかけたが、魏軍の方はびくともしない。そこで、蜀軍はまた山の頂上へと退却した。馬謖は事がうまく運ばないと見て、陣門をしつかり守備させ、ひたすら救援を待つことにした。

一方、王平は魏軍が攻め寄せたのを見て、軍勢を率こりついて討つて出たところ、ぱったり張郃ちやうつてと出くわした。数十合余り戦つたところで、王平は孤立無援で力尽き、やむなく退却した。魏軍が辰たつこくの刻（午前八時）から戌いぬの刻（午後八時）まで包圍しつづけると、頂上では水がなくなり、兵士は食べる物もなくなつて、蜀の陣中は大混乱に陥つた。

そのうち山の南側にいた蜀の軍勢が、馬謖が制止するのも聞かず、陣門を開けて下山し魏軍に降伏した。司馬懿はさらに山の麓ふもとから火をかけさせたので、蜀の軍勢の騒ぎはますますはげしくなつた。

馬謖はとでも守りきれないと見て、やむなく兵を驅かり立てて山を下り、西へ向かつて逃げ出した。

(解説)

こうして、山上に布陣した馬謖は、汲水路きゅうすいじろ(水を汲みに行くルート)を断たれ大敗を喫します。諸葛亮は前進基地を失うことになり、諸葛亮が綿密めんみつに組み立てた作戦は、音をたてて崩れてしまいます。若い馬謖の起用は裏目にでてしまいました。諸葛亮のそれまでの粒々辛苦りゅうりゅうしんくは、若い馬謖の慢心まんしんによって水泡すいほうに帰してしまいました。しかも彼は、諸葛亮が自分の後継として、大成たいせいを期待した人物だったのです。

一方、王平は馬謖の敗退後、残留兵ざんりゅうへいをまとめて整然と退却します。張郃も伏兵ふくへいを疑って追撃はしませんでした。学問はなくとも実戦の知恵を身につけた王平と、理論は頭にあつたが生きた理論になつていなかった馬謖が、対照的に描かれます。

「街亭の戦い」の敗北を知った諸葛亮は、すぐに西城県さいじょうけんに退きますが、司馬懿はすぐに大軍を率いて西城県へ押し寄せます。その時、諸葛亮のもとには文官しかおらず、半分の兵士は兵糧かんちゆうを漢中へ運びに行つたままでした。魏軍が城門の前まで攻め寄せてくると、諸葛亮は「空城くうじょうの計」で魏軍を退けます。

(本文抄)

諸葛亮が城壁に上がって眺めたところ、はたせるかな、天を衝くほどの砂煙りをあげながら、二手に分かれた魏軍が西城めざして殺到して来るではないか。

そこで、諸葛亮は、旗さし物をすべてしまい、部将はそれぞれ城壁の持ち場につき、勝手に動き回ったり大声を発する者は、その場で斬る、と命令を出した。

そのうえで、四方の門を開け放ち、各門に二十人の兵士を配置して、ふつうの領民の姿をして道を掃き、私に計略があるから、魏軍が攻め寄せても、騒いではならぬ、と指示した。

かくして、諸葛亮は鶴髦をはおり、綸巾を頭に載せて、二人の小童を供に連れ、琴を持つて物見櫓に上ると、欄干を前にして座り、香を焚き琴を奏ではじめた。

司馬懿の先手の軍勢が城壁の下に到着したが、このようすを見ると、先へ進むことができず、急いで司馬懿にこの旨を知らせた。司馬懿は笑って本気にせず、全軍を停止させると、みずから馬を飛ばして様子をさぐりにきた。

すると、諸葛亮が物見櫓の上に座り、にこやかに笑いながら、香を焚き琴を奏でている姿が目に入った。

諸葛亮の左側には宝剣を捧げ持つ童子、右側には弘子を持つ童子が控えている。また、城

門では、二十人余りの領民が頭をたれて掃除をしており、傍らかたわに人がいないようなようすだった。

司馬懿はこれを見て不審ふしんに思い、ただちに中軍にもどるや前軍と後軍を入れ替え、北の山道へ退却せよと命じた。二男の司馬昭は言った。

「諸葛亮は軍勢がいないから、わざとあのようなことをしているではありませんか。退却することはありません」

「諸葛亮は、慎重で危ない橋は渡ったことのない人物だ。今、城門を開け放っているところを見ると、伏兵かくひいがいるに違いない。もし進撃すれば、やつやつの計略にはまることになる。おまえたちにわかることではない。早く退却せねばならない」と司馬懿。

そこで二手の軍勢は残らず退却して行くと、諸葛亮は手を打って笑った。文官たちはただ呆然ぼうぜんとして、諸葛亮にたずねた。

「司馬懿は魏の名将と聞いています。今、十五万の精銳せいゑいを率いてここまで押し寄せて来たのに、丞相じょうしょうを見るなり、急いで退却したのは、どうしたわけでしょうか」

「彼は、私がふだん用心深く慎重だから、危ない橋は渡るはずがないと思っただのだ。このようすを見て、伏兵がいるのではないかと疑って退却したのだ。私このとて好んで危ない橋を渡つ

たわけではない。やむをえなかつただけだ。やつは必ずや軍勢を率いて北の山道に向かったに相違ない。私はすでに関興かんこうと張苞ちやうほうの二人に、あそこで待ち伏せるよう申しつけてある」と諸葛亮。

「丞相みょうけいの妙計めいけいは、鬼神きじんも予測できません。私どもなら、城を棄てて逃げ出したことでしょう」と一同は驚き敬服しながら言った。

(解説)

諸葛亮は「空城の計」で司馬懿の大軍を退けると、すぐに漢中へ引き返していきます。

陽動作戦で箕谷きこくに向かった趙雲ちやううんも引き揚あげてきますが、追撃してくる魏軍を打ち破り、何も失わずに漢中へもどつて来る見事な退却戦をおこないます。それを見た諸葛亮は、彼に賞賜しょうしを与えようとしますが、趙雲はそれを、「負け戦なのになぜ下賜かがあるのでですか」と彼らしい正論せいろんを述べて辞退します。

諸葛亮が全幅の信頼を置いた趙雲も、この翌年病でこの世を去ります。趙雲は、長寿ちやうじゆをまつとうして安らかな死を迎えています。関羽や張飛は非業ひごうの死を遂とげていますが、趙雲の穏やかな死は、それだけに深く印象に残るものがあります。

関羽・張飛・黄忠・馬超に続き、ここに趙雲も亡くなり、蜀の陣容は寂しくなる一方です。諸葛亮は漢中に帰ると、馬謖を陣中に呼び入れず。

(本文抄)

馬謖は涙を流しながら言った。

「丞相には私をわが子同然と思っていたいただき、私も丞相を父と思っておりました。死罪は覚悟の上ですが、丞相にはなにとぞ舜しゆんが鯀こん（禹の父）を殺し禹を用いた故事を思いおこしていただれば、私は死んでも思い残すことはありません」

言いおわると、馬謖は声をあげて慟哭とうくした。諸葛亮は涙をぬぐって言った。

「私とおまえは兄弟同然なのだから、おまえの子は私の子と同じだ。心配するにはおよばない」

左右の者が馬謖を軍門の外に引きずり出して、斬ろうとした。そのときちようど参軍の蔣琬しやうゑんが成都せいとから到着し、首斬り人が馬謖を斬ろうとしているのを目にし、仰天して「待て」と叫んだ。

蔣琬は諸葛亮と会って言った。

「昔、楚そが得臣とくしんを殺すと、晋しんの文公ぶんこうは喜びました。今、天下はまだ平定されておりませんのに、智謀ちぼうの臣ちんを殺すのは、なんと惜しいことではありませんまいか」

「昔、孫武そんぶが天下によく勝利をおさめることができたのは、法の用い方がきちんとしていたからだ。今、天下が分かれ争い、戦いが止むことがないのに、法をないがしろにすれば、どうして敵を破ることができようか。だから、馬謖は斬らねばならないのだ」と、諸葛亮は涙を流しながら言った。

まもなく、首斬り人が階下で馬謖の首を捧げると、諸葛亮は慟哭とうくしてやまなかつたので、蔣琬しやうわんがたずねて言った。

「すでに幼常せうじやう（馬謖の字）は罰せられ、軍法は正されたにもかかわらず、丞相にはどうしてお泣きになるのですか」

諸葛亮は答えて言った。

「私は馬謖のために泣いているのではない。先帝せんてい（劉備）は白帝城で亡くなられる際に、『馬謖は言葉ばかりで実質がないから、重用してはならない』と私に注意された。今、私は深く自分の不明ふめいを恥じ、先帝のお言葉を思い出して泣いたのだ」

聞いた将兵は、みな涙を流さないものはなかった。馬謖は享年きやうねん三十九歳。ときに建興六けんこう

年（二二八）夏五月のことだった。

（解説）

諸葛亮は、参軍の蔣琬の反対を押切り、涙をふるつて馬謖を斬罪さんざいに処します。

劉備は臨終のさい、「馬謖は言葉巧みで頭はいいが、実質が伴わないから重要な仕事をさせてはいけない」と諸葛亮に注意を与えていました。この世の辛酸しんさんをなめ尽くし、人物の裏表うらおもてを見てきた劉備に一日の長があつたのです。さすがの諸葛亮も、馬謖の起用はその判断くまに曇りが生じた例とされています。

しかし、それを承知の上で、諸葛亮は、馬謖に実戦の経験を積ませようとしたのではないでしょう。それだけ蜀の人材は不足していたのです。蔣琬は、人材確保をせねばならないときに智謀の臣を殺すのは惜しいと述べます。

また、趙翼ちやうよくも、「惜おしむらくはこの時、人才すて已に魏・呉二国に収め盡つくされ、故に（蜀が）得る人、較ほぼ少なし（『二十二史劄記』）」（惜しいことにはこの時、才能ある人材はすでに魏と呉に収用されつくしたため、蜀が獲得した人材は魏や後に比べると少なかった）、と蜀の実状を指摘しています。

また、このころ蜀では、劉備と苦楽をともにした第一世代の人材が亡くなり、諸葛亮の智謀は冴えていても、それを現実の形あるものとする人材群が不足していました。彼が馬謖の欠点を承知の上で使わざるをえない状況だったのです。

諸葛亮はこの一年後に再び北伐をおこないますが、そのとき次のように言っています。

「（第一次北伐から）わずか一年しかたっていないのに、趙雲をはじめ七十人の部将を失い、突撃隊長もありません。数年もすれば三分の二を失うでしょう」（『三国志』諸葛亮伝）と。果たさねばならない使命と現実の厳しさを直視し、悲痛な胸中を吐露しています。

ともあれ、「街亭の戦い」は、惜しみても余りある痛恨の敗北でした。もし勝利をおさめていれば、北と南の交易路がつながって蜀の国力は高まり、諸葛亮の「天下三分の計」は実現に向けて大きく前進したことでしょう。

ここで「泣いて馬謖を切る」を、歴史書『三国志』で見たいと思います。

『三国志』には、街亭の敗北後の馬謖について、内容の違う二つの記載があります。

一つは、「諸葛亮伝」の「馬謖は諸葛亮の指示にそむき、行動は妥当性を欠き、張郃（魏の將軍）に大敗した。漢中に帰り、馬謖を死刑にして兵士に謝罪した（謖を戮して、以て衆に謝す）」というものです。『三国志演義』はこれを採用しています。

二つめは、「馬良伝」の「馬謖は投獄されて死に（謖下獄して、物故す）、諸葛亮は彼のために涙を流した」というものです。

こちらは馬謖は斬罪ざんざいされたのではなく「投獄されて死んだ」、獄死、つまり病死か自殺の可能性もあるということです。

しかし、馬良伝の注に引く「襄陽記」に、「蔣琬しょうわんは諸葛亮に向かつていった、『天下がまだ平定されていないのに智謀ちぼうの士を殺したとは、なんと残念なことでしょう。』諸葛亮は涙を流していった、『四海しかいの内は分裂し戦争がまさにはじまらんとするときに、もし法律を無視したならば、どうして逆賊ぎやくたくを討つことができようぞ。』』とありますので、一般的には刑死したものと考えられています。しかし、獄中ごくちゆうでの病死または自殺の可能性が、無きにしてもあらずというところでは。

こうして、諸葛亮の第一回北伐は、失敗に終わりました。